

『紫式部日記』と『源氏物語』における『維摩経』利用

石井 公成

一 はじめに

紫式部の一生において、最も鼻が高かったことは何だろう。式部が仕えていた中宮彰子が、父である藤原道長の邸宅で敦成親王を出産して宮中に還御するにあたり、中宮の意向で『源氏物語』が土産に選ばれたこと、しかも、書の巧みな人々への書写の依頼や冊子作りなどの作業を式部がとりしきったことは、その有力な候補となるに違いない。時の権力者であった道長がその豪華な冊子作りを後援し、上質の紙・墨・筆などを気前良く提供したことも、式部の自尊心を満足させたはずである。道長が持参した硯を中宮が式部に与えたと、『紫式部日記』は記している。こうした道長の支援ぶりは、噂となって広まり、式部のライバルたちを口惜しがらせたことだろう。さらに、その『源氏物語』を女房に朗読させて聞いていた一条天皇が、「この人は、『日本書紀』をこそ講義した方がよさそうだが、本当に学問のある人に違いない」と賞賛したのは、式部ばかりでなく、学者であった父の為時を初めとする一門に

とつての名誉であつたろう。しかし、漢詩文の知識をそなえた教養ある歌人を自認していた式部にとつて、最も誇らしかつたのは、若宮誕生の五十日の祝いの席において中宮が謁見を許し、祝い酒に酔つた殿上人たちが御前に参上した際、当時第一の才人である藤原公任が、几帳を隔てて多数いならんでいた女房たちのところにやってきて、「あなかしこ、このわりに若紫やさぶらふ（おそれいります。この辺りに若紫が伺候しておるかな）」と呼びかけてきた時ではなかつたか。

というのは、『紫式部日記』を読むと、この公任の言葉を記するにあたって、式部がどれほど構成に工夫をこらしているかが知られるからである。たとえば、親王誕生五日目の祝いを記した箇所では、上達部たちに「祝いの杯を受けて、歌を詠め」などと言われた場合に備え、女房たちが和歌を思案していたと述べたのち、女房たちは「四条の大納言に杯をさし出すような場合は、歌の出来栄えはもちろんのことだけど、声の出しようも心構えがいろいろでしよう」などとささやきあつていたと記している。すなわち、公任がどれほど尊重され、また気を使われていたかが、さりげなく語られているのである。実際、公任は貴族仲間だけでなく、女房などとも盛んに雅びな歌のやりとりをしたことで知られている。³³ところが、その少し後の箇所では、そうした特別な存在である公任が、女房たちが控えているあたりまでわざわざやってきて、几帳越しに式部に呼びかけてきたことが書かれているのである。式部は公任にそのように言われても、「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむ（光源氏に似た方もいらっしやらないのに、かの紫上はましてどうしておいになろうか）」³⁴と思ひ、座つたままで黙つて聞き過ごしていたと記しているが、『紫式部日記』の後半で長々と論じられているのは、まさに「女房は上達部たちの言葉にどう応対すべきか」という問題にはかならない。そこでは式部は、中宮彰子方の女房たちの消極さに対する殿上人たちの批判に触れ、彼女たちがあまりにも控えめになつてしまつた事情を詳しく説明して弁解し、引つ

込み思案すぎるのはよろしくないと認めつつも、やたらと浮かれてしゃべるのもみっともないのであって、その場その場で適切に振舞うことが大切であることを強調している。その式部が反省の言葉もなく書き留めている以上、式部が公任の戯れの言葉に答えず、座ったまま聞き過ぐすにとどめたのは、適切な対応ということになる。酒が進んだ宴席での公任のあのような呼びかけに対しては、あのような対処の仕方であつたのだということなのだろう。その直前の箇所、重んじていた藤原実資に式部がこちらから話しかけたことが記されているのは、自分は黙っていたばかりではないのだ、という弁明の意も兼ねていよう。前後の記述とこれほど密接に結びついた形で書かれている箇所は、『紫式部日記』では稀である。衆人が見守る中で公任が呼びかけてきた場面は、中宮の出産の場面とならぶ『紫式部日記』中の山場の一つなのである。

しかし、どのような理屈をつけたところで、ただ黙つたままで終わってしまったのでは、清少納言などの機知に富んだ応対と違つて面白くない。才人である公任が、わざわざ光源氏を気取つて呼びかけてきたのだから、『源氏物語』中の事柄や『源氏物語』に關係深い中国漢詩などを踏まえた洒落た返事をして良いではないか。清少納言の才気煥発な応対を好んでいた殿上人、あるいは競争相手である齋院の女房などの中には、そのように評した者たちもいたことだろう。まして、漢詩の知識を生かした清少納言の見事な応対には、よく知られているように、公任に關わる例が二つも含まれているのである。その公任が洒落た呼びかけをしてきたのだから、清少納言のことを、知つたかぶりで学問不足で浮わつきすぎなのだから行く末が悪くなつて当然、と口をきわめて罵つている紫式部が、清少納言にもまさる才気ぶりを示したいと思わなかつたとは考えにくい。少なくとも、かの出来事を後になつてから記するにあたっては、何かしら典拠を踏まえ、機知に富んだ書き方をしていくはずである。

筆者は、その典拠とは、『維摩經』を踏まえた『世説新語』中の逸話であつたと考える。「光源氏に似た人もいない

のに、ましてかの紫上はどうして」という書き振りだと、紫上は光源氏よりはるかに格上の存在ということになるため、この箇所をめぐって盛んに議論がなされているが、『世説新語』を考慮すれば、右のような表現がなされた理由が理解されるのである。また、式部がこれほど重要な箇所『維摩経』に基づく話を利用していることは、『源氏物語』について考えるうえでも見逃せないことと言えよう。

二 清少納言『枕草子』への対抗心

萩谷朴のすぐれた論文、「枕草子を意識しすぎている紫式部日記―反撥による近似、比較文学の一命題⁴―」は、式部が清少納言を嫌い、『枕草子』の二々の記述に反撥して乗り越えようとするあまり、『紫式部日記』は『枕草子』の構成に非常に似るに至ったと指摘している。公任の呼びかけの場面は、その代表的な例であり、この出来事こそ、藤式部と呼ばれていた式部が紫式部と称されるようになったきっかけだというのが萩谷の推測である。清少納言の綽名は「草の庵」などという情けないものであるのに対し、こちらは紫式部という優雅な名であり、また清少納言は公任の句を用いただけであって、綽名を呼びかけにやって来たのはお調子者の源中将宣方にすぎないのに対し、式部の場合は、公任本人が呼びかけにやってくるのだから、その違いは決定的であると式部は言いたいのだと、萩谷は主張するのである。萩谷は後年の『紫式部日記全注釈』⁵でも同じ主張を繰り返したうえで、この宴席以前にも式部のことを「紫の君」「紫の局」「紫の式部」などと呼んだ人がいるかもしれないが、紫式部という綽名が定着したのは、この出来事がきっかけなのであって、少なくとも、式部はこれを自らの綽名の由来として書き残そうとしたのだ、と説いている。これは妥当な推測と思われる。そうであれば、式部がこの出来事の記述に神経を使っている

のは当然であらう。

確かに、「若紫やさぶらふ」の場面は、清少納言が漢詩文の素養に基づく臨機応変な応対をして評判となった二つの出来事、それも、公任と関わりが深い出来事にも良く似ているのである。いずれも『枕草子』中の有名な話だが、説明の必要上、概略を記しておく。まず、二月末の風が強くて雪さえまじる寒い日に、公任がよりによって「少し春有る心ちこそすれ」という下の句を送ってきたため、清少納言は今日の空模様は本当によく合っていると思ひ、「空さむみ花にまがへて散る雪に」という上の句をつけて応え、評判になったという。つまり、清少納言は、公任の句が白居易「南秦雪」中の「三時 雲冷やかにして多く雪を飛ばし 二月 山寒くして春有ること少し(三時雲冷多飛雪 多二月山寒少有春)」に基づくことを見抜き、見事に答えてみせたのである。白居易のこの詩は、南秦に赴くことになった親友の元稹の詩に唱和し、その地の寒冷さを知る白居易が今後の苦勞を思いやっけて詠んだものであるため、公任の句は、謎かけの形で、「寒い中、どのようにおすごしですか」と尋ねていることになる。つまり、清少納言を元稹に見立て、自らを白居易の立場に置いたうえで慰問の挨拶状を送ったに等しい。⁶⁾

もう一つの例は、多くの侍臣たちが宮中で物忌みにもついていた雨の夜に、些細なことで清少納言と絶好状態になっていた藤原齊信が皆としめしあわせ、「蘭省花時錦帳下」とだけ書いた手紙を手に持たせて清少納言に示し、下の句を答えるようせきたてさせたという話である。清少納言は、白居易の詩であることはすぐに分かったものの、「廬山夜雨草庵中(廬山の夜雨 草庵のうち)」という原詩をそのまま書き付けたのでは芸がないため、公任がかつて藤原挙直に読みかけた下の句、「草の庵を誰かたずねむ」を、手近にあった消え炭で手紙の余白に書きつけて送り返し、どのような上の句が付けられてくるかと心待ちにしていたという。ところが、返事はなく、翌朝早く、源中将宣方が局までやってきて、「ここに草の庵はあるか」と仰々しい調子で尋ねた。そこで、清少納言は、「どうしてそ

んな人間らしくないものがおりましよう。「玉の台は」とでもお探しになるのであれば、お返事しましように」と答えたところ、宣方は応答に喜んで事情を説明し、誰もが大意即妙な応答に感心するばかりで上の句をつけられなかつたと述べ、清少納言に「草の庵」という綽名がついたことを告げて帰っていった。さらに、夫の則光もやってきて、「これほど面目をほどこしたことはありません」と祝いを述べたうえ、急いで参上するよう中宮に呼ばれて行くと、その話が天皇の耳にまで達し、天皇が面白がっていたことを告げられたという。まさに機知に富んだ見事な対応ぶりであり、かつ開けっぴろげな自慢の連続と言うほかはない。源宣方の呼びかけは、新たな綽名を用いたものには違いないが、大げさな調子で尋ねたということは、清少納言を廬山の草庵で淋しく暮らしている白居易になぞらえ、自らをその白居易の見舞いにおもむいた友人に見立てて、「ここに草の庵はいるか」と呼びかけたことになる。いずれの場合も、白居易がらみの見立てを行って遊んでいるのであり、公任がからんでいるのである。

これに対して、公任の「このわたりに若紫やさぶらふ」という問いかけは、自分を光源氏に、式部を紫上に見立ててのものであり、見立てによる遊びという点では、まったく同じである。ただ、『源氏物語』を用いて、そうした見立て遊びを行ったことはきわめて重要である。公任は、むろん、『源氏物語』を評価している中宮彰子や道長への追従を兼ねてそうした見立てを行ったのだろうが、婦女子の暇つぶしであって嘘ばかりと見下されていた物語が、平安貴族にとっての文学の神である白居易の詩と同じような扱われ方をされたことは見逃せない。式部にとって、これほど喜ばしいことは、まずあるまい。

さて、清少納言は、宣方の呼びかけに反発し、「女性の住まいを指す優雅な漢語である玉台などであればともかく、草の庵などという味気ない呼びかけ方には返事はしたくない」と答えている。これに対して、式部は実際に返事していないという違いはあるものの、返事をしたくないという点はどちらも同じである。しかし、清少納言嫌い

の式部が、清少納言がこれほど徹底して漢詩の知識自慢をしている箇所に対抗して書いて以上、清少納言を上回る知識を示そうとしないとしたら、それは不自然ではなからうか。ここは、清少納言などよりはるかに漢文学の知識があるところを、何が何でも見せつけたい場面である。

そこで、「返事をしたくない」と言葉に出して返事してしまう人よりも、まったく返事をしない人の方が上であることを証明してくれる典拠といえは、浮かんでくるのは『維摩経』しかあるまい。『維摩経』の入不二法門品では、維摩詰が大勢の菩薩たちに対して、菩薩が不二法門に入るとはどういうことかと尋ねたところ、法自在菩薩を皮切りとして諸菩薩が次々に自分の見解を述べ、最後に智恵で知られる文殊菩薩が、「一切の法に於いて言無く説無く、示す無く識る無く、諸問答を離る。是れ不二法門に入ると爲す（於一切法無言無説。無示無識離諸問答是爲入不二法門）」と結論づけ、その文殊が維摩に見解を尋ねると、維摩は「默然として無言」であったため、文殊は、「文字語言有ること無し。是れ真に不二法門に入るなり（無有文字語言。是真入不二法門）」（大正藏十四・五五二下）と讚歎したという。すなわち、文殊は言葉を離れていることが真に不二法門に入ることだと言葉で語ったのに対し、維摩は言葉離れた境地をまさに身をもって示したため、文殊が賞賛したというのである。文殊なればこそ維摩の沈黙の真意が理解できた、という設定になっていることは言うまでもない。

しかし、この文殊と維摩の問答では、「かの紫上はましてどうしておいでにならうか」という表現にはつながらない。そこを埋めるのが、『世説新語』文学篇に見える支道林と王担之の問答である。

支道林、『即色論』を造る。論成りて、王中郎に示す。中郎、都て無言なり。支曰く、「黙して之を識るか」と。王曰く、「既に文殊無し。誰にか能く賞されん」と。

支道林造即色論。論成、示王中郎。中郎都無言。支曰、黙而識之乎。王曰、既無文殊。誰能見賞。（『世説新語』

『道行般若経』や『維摩経』を盛んに講釈し、機知に富んだ問答で有名であった支道林(支遁)が、空と色との関係について論じた『即色論』を書き上げ、当時の文人の代表であった王中郎、すなわち王坦之に自信満々で示すと、王坦之はまったく言葉を発しなかったため、支道林が『論語』述而篇の「子曰く、黙して之を識り、学びて厭わず、人を誨えて倦まず、何か我に有らんや(子曰、黙而識之、学而不厭、誨人不倦、何有於我哉)」に基づいて「孔子のように)黙っていながらきちんと理解しているというわけですか」と尋ねると、王坦之は「文殊もいない以上、(私の沈黙の意図を)いったい誰が理解して評価できようか」と述べたというのである。²⁷つまり、僧侶の支道林が儒教の徒である王坦之のことを孔子になぞらえたところ、逆に王坦之が仏典を踏まえて自分を維摩に見立てたうえで、君は才人ぶっても文殊には遠く及ばないと断定したのである。これは、「柄でもないから、文殊気取りはやめろ」とやりこめたに等しい。

式部はこの箇所を利用し、「到底およばないのだから、光源氏気取りはおやめなさい」と公任を突き放し、光源氏なればこそ真価を見出すことのできた紫上のことを、つまりは自らを維摩に重ねあわせて沈黙を守ったのである。正確に言えば、あの時、自分が黙っていたのはこうしたことを考えてのことだったのだと、後から説明したのである。むろん、『源氏物語』の巻が進むにつれて、藤壺の代用品でしかなかった紫上が重要な役割を果たすようになっていくが、光源氏より紫上の方がはるかに格が上であるかのような書き方がなされたのは、『維摩経』と『世説新語』をふまえていたことが主な理由であろう。²⁸『紫式部日記』のこの記述は、清少納言に対抗するものであると同時に、あの場で自分が黙っていたのは、とっさに機知に富んだ返答ができなかったためではなく、考えあつてのこと、典拠を踏まえてのことなのだ、という弁明も兼ねているものと思われる。なお、『世説新語』には、清談を志向する点

では同じでも、洒落た会話を果てしなく続けてゆく人々と、言葉の使用をできるだけ少なめにしようとする人々が描かれており、これが式部の女房応対論にも影響を及ぼしていると見られる。

三 公任と『維摩経』の関係

公任とその呼びかけに答えなかった自分のことを、文殊（を気取る者）と維摩になぞらえたと推測するのは、『維摩経』と『世説新語』が日本の貴族社会にかなり広まっていたことによる。まず、『世説新語』については、奈良時代にには既に『懐風藻』の詩人たちがしばしば用いていたうえ、空海も『三教旨帰』で引用し、また嵯峨天皇の求めに応じて『世説新語』の抜粋を屏風に書いて献じている。さらに菅原道真に「相府文亭始読世説新語詩」の作があり、式部の同時代人である慶滋保胤も「池亭記」において『世説新語』任誕篇の言葉を用いていることから、その流行ぶりが知られる。むろん、藤原佐理『日本国見在書目録』には、「世説十 宋臨川王劉義慶撰、劉孝標注」と録されている¹⁰。

一方、『維摩経』と文学の関係については、中国では謝靈運の「維摩詰經中十譬讚八首」（道宣『弘弘明集』）が有名であるほか、他にも鳩摩羅什・梁武帝・簡文帝などが十諭詩を作っており、『維摩経』の十諭が無常を理解する際のよりどころの一つとなっていたことがわかる¹¹。日本では淡海三船「聴維摩経」（『経国集』）が残されており、『万葉集』には、『維摩経』の内容を明確に詠いこんだものではないが、天平十一年（七三九）十月の維摩講に当たって歌われたという仏前唱歌が録されている。また、空海には、我が身の無常を様々なものに喩えた『維摩経』の十諭と六諭までが重なる『大日経』の十諭を詠んだ「詠十諭詩」（『続性靈集』）がある。

そうした中で、見逃せないのは、ほかでもない公任が『法華経』二十八品歌とともに『維摩経』十喩歌を詠んでおり、現存文獻においては、これが十喩を和歌の形で詠んだ最初の例であることであろう。公任は、長徳元年(九九五)か翌年あたりに、藤原行成・源為憲などとともに『法華経』の内容を詠んだ漢詩を作っているほか、法華経二十八品歌も詠んでいるが、これは姉として道長を後援してきた東三条院詮子の追善のために長保四年(一〇〇二)に行われた法華八講で詠まれたものと推定されており、この時期に経旨詩から経旨歌へという移行がなされたことが指摘されている¹²⁾。その道長は、翌年十月に道綱・公任・斉信・有国などの上達部七名、および殿上人七十余名をひきつれて興福寺の維摩会に臨席し、七日間の期間中に宇治遊覧などもしているため、公任の維摩経十喩歌は、この維摩会の際に詠まれた可能性が高いという¹³⁾。公任はこの前後の時期には、道長が主催する法要などでしきりに『法華経』に基づく歌を詠んでいるうえ、他の貴族たちにもまして仏教に対する関心が強く、十喩歌においても、『維摩経』全体を理解したうえで詠んでいることは重要である。維摩会に参加した主だった文人たちがそれぞれ維摩経十喩歌を詠んだ可能性もあるが、現存するのは公任の歌のみであることを考えると、公任だけが代表して十喩歌を詠んだか、あるいは公任の十喩歌が他の人のものより格段にすぐれていたことが考えられる。いずれにしても、公任の十喩歌は、当時かなり話題になったことであろう。製作の時期は不明であるものの、式部の朋輩であつて式部も一日置いていた赤染衛門が、女性の身でありながら維摩経十喩歌を残しているのは、公任の影響と思われる。

こうした背景がある以上、公任の維摩経十喩歌が作られた五年後における公任とのやりとりを記す際、式部が『維摩経』を考慮した書き方をしたとしても、けっしておかしくない。そもそも、沈黙している人の方が偉いという文脈であれば、維摩が思い浮かべられるのは当然なのである。ただ、白樂天の漢詩でなく、『世説新語』などを踏まえてひねりすぎたため、式部の意図が今日に至るまで理解されずにきたのは、不幸なことであつた。

四 『源氏物語』と『維摩経』

このように、『紫式部日記』の重要な箇所において『維摩経』が使われているのであれば、『源氏物語』においても『維摩経』が利用されているであろうことが推測される。『源氏物語』と『維摩経』の関係に関する研究はこれまでもほとんどなされておらず、近年になって三角洋一が、螢の巻の物語論、および、匂宮の巻における薫の造型のうちに『維摩経』の影響を想定している程度であろう。¹⁵⁾ 玉蔓は物語をひたすら本当のことと信じているのに対して、それらは「そらごと」であるものの経典における様々な方便に相当するのであって、そうした物語にこそかえって真実が含まれていると指摘する源氏、ないし源氏のように物語作者の意図を読み取ることのできる賢明な読者のことを、『源氏物語』作者は「維摩詰に見立てたことになる」と、三角は説いている。¹⁶⁾

この源氏を維摩に見立てるといふ視点はきわめて興味深いものであり、より可能性が高い実例を雨夜の品定めに見出すことができる。物語論は「仏、御法、方便、方等経、菩提、煩惱」などの仏教用語をそのまま並べており、仏教を考慮した議論になっていることは明らかである。雨夜の品定めの場合はそのような言葉は少ないものの、「法の師の、世のことはり説き聞かせむ所の心地する」とあって、左馬頭の演説が説法師の説教にたとえられているうえ、この品定めの際は天台教学という三周説法の形式になっていることが早くから指摘されているため、こちらもかなり仏教を意識した書き振りになっていると見てよいであろう。

雨夜の品定めの場合には、『世説新語』文学篇の逸話とは関係なく、『維摩経』そのものを利用していると思われる。まず、女性のあり方に関する頭中将の問いかけに始まって、左馬頭が理想の妻の条件を述べ、自らの経験を語

り、頭中将と式部丞も体験を語ったのち、左馬頭が女性論のまとめを述べるのだが、結論は意外なことに、「言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける（女は、言いたいであらうようなことでも、時々は黙っている方が良いということなのです①）」というものであった。よりによって、あれだけ諷知り顔をして長広舌を振るった人物が、こういう訓戒を垂れるというのもおかしな話だが、大事なのは、「しゃべりすぎてはならない」と言葉でしゃべっていることである。これは、「返事はしません」と返事している才女の清少納言に通じるものであり、また、「一切の法に於いて言無く説無く、示す無く識る無く、諸問答を離る。是れ不二法門に入ると為す」と言葉で語ってしまった智恵ある文殊に通ずるものである。

それに対して、源氏は言葉を発していない。三つの階層のうちの限られた女性しか知らないにもかかわらず、あれこれ語りまくった後に「言はまほしからむことをも、一つ二つのふしは過ぐすべくなむあべかりける」と結論づける左馬頭と違い、源氏は初めに頭中将をからかったのみで、議論が本格化してからは最後までまったく言葉を発しないのである。しかも、「上が上を選び出て」た理想の女性である藤壺とこの段階で既に関係があったと思われるうえ、以後、中流の空蟬やそれよりやや下の夕顔を初めとして、あらゆる階層の様々なタイプの女性を知るようになるのだから、源氏は「沈黙する体現者」ということになり、維摩に似てくる。源氏は幼い頃は、道理をわきまえた人たちからは、「かかる人も世に出でおはするものなりけり」と讃歎されているが、これは三十二相を備えて「出世」する仏を思わせる表現である。このことは、幼い光源氏に対する高麗の相人の占いが、転輪聖王になるか世間の救済者となるかという釈尊誕生の際の予言を踏まえていることと響きあっており、光源氏を仏のような存在として描こうとする面もあつたことを示すものである。その完全無欠とされる釈尊にしても、王子の身でありながら早くから悩みを持ち、結局は出家するのに対し、天皇の子である光源氏の場合も早くから悩みをかかえており、出家

するかどうかということが大きな課題として生涯つきまわっている。

一方、雨夜の品定めでは、理想とされる条件をすべて備えている女性はいないと左馬頭が断言しているにもかかわらず、源氏は藤壺はそれらの条件を完璧に備えていて過不足がないと考えているため、藤壺もまた三十二相を備えた仏の如き扱いとなっている。桐壺の巻において、源氏と藤壺が「光る君」「かかやく日の宮」と並び称されたこと記されているのは、また藤壺の描写が初めのうちは類型的であるのは、当然なのである。『源氏物語』は巻が進むにつれて、特に若菜の巻以後になると、人物の造型が巧みになって類型的な描き方は少なくなるが、『源氏物語』は後半になればなるほど仏教色を増してゆくため、経典の利用という問題に対しては細心の注意を払うべきであろう。

注

(1) この部分の異本と解釈については諸説あるが、ここでは工藤重矩「紫式部日記の「日本紀こそ読みたまふべけれ」について」(南波宏編『紫式部の方法』、笠間書院、二〇〇二年)の解釈による。なお、『紫式部日記』の解釈については、曾澤太吉・森繁敏『紫式部日記新釈』(武蔵野書院、一九六四年)、山本利達『紫式部日記攷』(清文堂、一九九二年)に教えられることが多い。

(2) 「さぶらふ」とあるのみで「たまふ」などの敬語が用いられていないのは、この発言は式部を紫上に見立ててのものであるとはいえ、公任が『源氏物語』の作者である現実の式部、すなわち中宮のお側に女房として控えているはずの式部を強く意識していたためと考える。

(3) 後藤祥子『王朝和歌と史的展開』「公任と源氏物語の距離」(笠間書院、一九九七年)。なお、後藤は、役不足であるとはいえ、公任はこの宴席の参加者の中では「源氏世界に最も近い人物」であったことに注意している。

(4) 萩谷朴「枕草子を意識しすぎている紫式部日記―反撥による近似、比較文学の一命題―」(『二松学舎大学論集(昭和四十二年度)』、一九六八年三月)。萩谷は「わかむらさき」を「我が紫」と見るが、通説の通りに「若紫」と解して

差し支えないと思われる。なお、『枕草子』は、『紫式部日記』ばかりでなく、『源氏物語』にも影響を及ぼしており、兩夜の品定めの女性論が清少納言批判を含んでいることについては、浜口俊裕「清少納言を意識する紫式部―源氏物語」から『紫式部日記』へ―（『日本文学研究』二十八号、一九八九年二月）。

(5) 萩谷朴『紫式部日記全注釈（上巻）』（角川書店、一九七一年）四八三頁。

(6) 「少有春」は、少しだけ春の気配があるということではなく、春の気配がほとんど無いの意であることは、伊東倫厚「枕草子」少し春ある心ちこそすれ」と『白氏文集』二月山寒少有春」と又名「少有春」小考―（竹田晃先生退官記念学術論文編集委員会編『竹田晃先生退官記念 東アジア文化論叢』汲古書院、一九九一年）。漢詩文を利用した清少納言の和歌がやや生硬なものとなっていることについては、鄭順粉「藤原公任から見た枕草子の漢詩受容―同時代における評価の摸索」（中野幸一編『平安文学の風貌』、武蔵野書院、二〇〇三年）。

(7) 問答の当時は羅什の翻訳前であるため、支謙訳を用いていたはずだが、現行の支謙訳では「不二入門」は文殊の見解で終わっていて、維摩の沈黙に当たる部分がない。

(8) 源氏より紫上の方が上のような書き方がなされたことについては、『源氏物語』は光源氏を描いたものか女性たちを描いたものか、『源氏物語』は当時どのあたりまで成立していたかといった問題とからめて論じられており、また、式部は重厚な知識人であつて道長とは難しい関係にあつた具平親王を尊重しており、道長に追従する公任のような才人たちを軽んじていたことなどが指摘されているが、もう一点、考えるべきことがある。それは、公任に代表される日本の男性の文学と、式部という女性を書いた『源氏物語』との優劣、という問題である。『顔氏家訓』の冒頭の記述を踏まえて書かれた蜚卷の物語論を見ればわかるように、式部は自らの物語に対し、『日本書紀』やその手本となつた中国の史書などにもひけをとらないとする絶大な自信を持っていた（石井公成『源氏物語』における顔之推作品の利用―『顔氏家訓』と『冤魂志』―『王範妾』―）（『駒澤短期大学仏教論集』九号、二〇〇三年十月）。男女の歌のやりとりなどの場合、相手をからかうのが通例とはいえず、「若紫やさぶらふ」という箇所において、紫上をはなやかな源氏より上の存在として扱つたのは、そうした自負と無関係であつたとは考えられない。

- (9) 今濱通隆「劇談と黙識と『世説新語』の「言語」観についての一考察―」（『中国古典研究』第二十号、一九七五年一月）。
- (10) 大矢根文次郎『世説新語と六朝文学』（早稲田大学出版部、一九八三年、八十九頁）、大曾根章介『大曾根章介日本漢文学論集（三卷）』（『世説新語と日本古典』（汲古書院、一九九九年）。
- (11) 辰巳正明『万葉集と比較詩学』第三章 仏教と詩学―維摩講仏前唱歌について―（おうふう、一九九七年）。
- (12) 杉田まゆ子「公任の釈教歌―維摩経十喻歌 その発生の機縁―」（『和歌文学研究』六十九号、一九九七年十一月）。
- (13) 同右。
- (14) 僧侶との親交から見た公任の仏教信仰については、小柳淳子「公任と寺門の僧侶たち―『公任集』147―152番歌の背景―」（『和歌文学研究』六十六号、一九九五年九月）。
- (15) 三角洋一『源氏物語と天台浄土教』「蜩巻の物語論」（若草書房、一九九六年）、同「匂宮巻の薫の人物設定と『維摩経』」（『むらさき』四十輯、二〇〇三年十二月）。
- (16) 注15前掲書、八十頁。
- (17) 「一つ二つのふし」については、「十のうちの一か二くらいは」といった解釈もあるが、柏木の巻の冒頭に「一つ二つのふし」ことに、身を思ひおとしこなた」とあるため、「何度か」といった程度の意味ということになろう。

〔付記〕 本稿は二〇〇四年度駒澤大学特別研究助成（共同研究）による研究成果の一部である。